



慶應言語学 コロキウム

慶應義塾大学言語文化研究所
The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies

Agree and Nominal Licensing in Syntactic Theory: On the Default Specification of Case and Phase Heads

講師：森竹希望(九州大学/日本学術振興会特別研究員 (PD))

司会・コメンテーター：内堀朝子(東京大学)、北原久嗣(慶應義塾大学)

日時：2024年7月27日(土)~28日(日) 13:30-18:00

会場：慶應義塾大学三田キャンパス北館3階大会議室

※対面開催のみ(オンライン配信の予定はありません)

※今回のセミナーは生成文法研究の専門的知識が前提となります

使用言語：日本語

参加申込：研究所ホームページもしくは右のQRコードよりお申込み下さい

* 準備の都合により、事前申込をお願いいたします。

* 事前にお申込みいただかない方の当日参加も可能ですが、会場にて参加者カードへの記入が必要となります。



本発表では、生成文法理論に基づき、 ϕ 素性一致の有無に基づく二種類の格付与メカニズムに加え、名詞句の統語的位置を規定する二種類の名詞句認可条件を提案することにより、英語、日本語、トルコ語、韓国語の諸現象に対し、より原理的な説明を与える。更に、英語もしくは日本語を母語とする子供が発話する文における主語の格標示にも着目し、人間に生得的に備わる普遍文法 (Universal Grammar: UG) の一端を明らかにすることを試みる。まず、英語のような ϕ 素性一致を持つ言語では Chomsky (2000, 2001) が提案するように ϕ 素性一致の反映として格付与が行われることを論じる。しかし ϕ 素性一致を欠くと分析される日本語のような言語では、名詞句と ϕ 主要部に存在する格素性が上方一致関係を結ぶことで格付与がなされると主張する。また、従来不明瞭なままであったデフォルト格の理論的実装を行うだけでなく、Chomsky (1981, 1986a) の連鎖の条件に還元した格フィルターを発展させた形で、名詞句の移動の有無を考慮した二種類の名詞句認可条件を提示する。従来の分析では抽象格を与えられた名詞句の分布のみを踏まえて名詞句認可条件が提示されてきたため、デフォルト格を伴って発音される名詞句の扱いが問題となっていたが、本提案の下ではどちらの格を伴う名詞句の分布も適切に説明できることを導く。この提案に基づき、英語の存在 *there* 構文、Mad Magazine Sentence、日本語の主格脱落現象などに加え、トルコ語などの言語における目的語のかき混ぜにおける名詞句の分布を捉えられることを示す。さらに、子供の英語と日本語における主語の格標示の分析を通して、日本語で用いられる ϕ 素性を欠く ϕ 主要部が UG の初期値として指定されている可能性を示す。そして、英語を母語とする子供も ϕ 素性を完全に獲得するまでは当該の ϕ 主要部が使用できるために、日本語と同様の主語の格標示を行えると主張する。

主催 慶應義塾大学言語文化研究所

[お問い合わせ先]

〒108-8345 港区三田2-15-45 慶應義塾大学言語文化研究所
電話：03-5427-1595 (事務室直通) メール：genbu@icl.keio.ac.jp
<http://www.icl.keio.ac.jp>